



史料紹介

大平街道から鱒がやってくる



羽田真也（歴史研究所研究員）

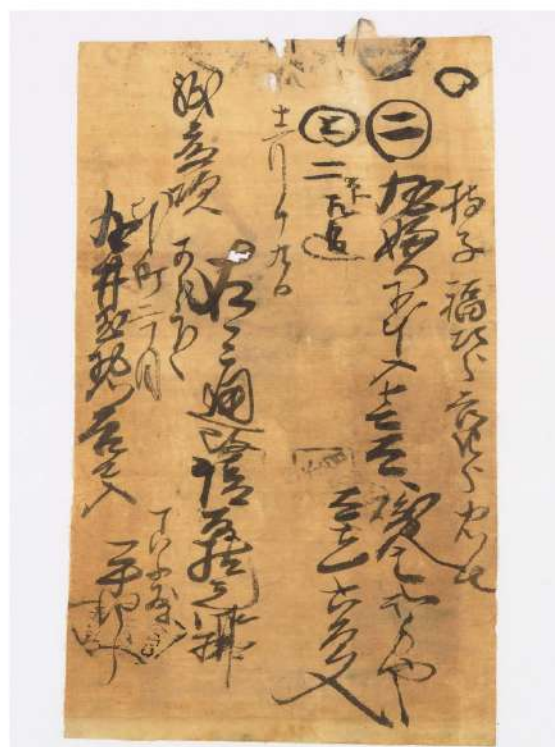
伊那谷の飯田と木曾谷の妻籠を結ぶ大平街道の中間にあった大平で宿屋を営んだ紙屋（大蔵家）は、街道を通る荷物の荷継ぎ（中継）も行っていました。そのためこの家の史料群（大平紙屋文書）には、紙屋が荷物とともに荷主から受け取った荷物の送り状が、江戸時代末を中心に数多く残されています。

その中に妻籠の丁子屋半四郎からの送り状が 90 通余りあります（写真参照）。興味深いのは、そこに記された荷物のほぼすべてが鱒であり、日づけが 12 月中・下旬に集中している点です。また、送り先は飯田城下町の 13 町（橋南）に屋敷を構える商人たちでした。古島敏雄氏は、大正期の飯田町では「飛騨鱒」が年取魚（大晦日の夜に食する魚）であり、「越中や能登の海岸で獲れた鱒が、冬だけ薄塩にして、馬の背で飛騨路をへて飯田地方に運ばれた」のだらうと述べていますが（古島敏雄『子供たちの大正時代—田舎町の生活誌』平凡社、1982 年、92～93 頁）、丁子屋の鱒もこうした年取魚用のものだったのでしょうか。

丁子屋の送り状をもう少し詳しく見てみましょう。90 通余りのうち 74 通は同じ年（おそらく天保 5〔1834〕年）のものと考えられます。この 74 通からは、12 月 15～23 日の短期間に大量の鱒が送り出されたことがわかります。また、鱒は 5 本をひとつの箱に入れ、持子と呼ばれる人が背負う場合は 1 人で 1 箱を、駄馬を使う場合は馬 1 頭で 3 箱を運んだこともうかがえます。持子や駄馬の荷物は、大平で飯田側から来た人馬に付け替えられたようですが、それでも妻籠やその周辺の人びとにとっては一定の収入源になったのでしょうか、例えば馬蔵という人は、9 日間に 7 度も持子や馬子として働いたことが知られます。また、持子には女性の名前も見えます。

これらの鱒の送り先は 13 町の商人 20 人余りでした。もっとも多く受け取ったのは本町二丁目の丸井屋惣吉で、その量は 44 箱（220 本）に及びます。こうした商人たちを介して、飯田城下町や周辺地域へ鱒がもたらされ、大晦日のお膳に並ぶことになったと思われます。

丁子屋の鱒がどこで獲れたものなのかはよくわかりません。ただし、送り状には「越中伝四郎分」「越中佐四郎殿」といった記載が散見されます。古島氏の記述も踏まえるならば、越中国（現在の富山県）で獲れた鱒が塩漬けにされ、妻籠や大平を経由して飯田へ持ち込まれたと想定できるかもしれません。



丁子屋半四郎からの送り状